

The Atlas

< 2024年5月号 >

【 “「読む」ことは、自分を奏で、他人を共振させること。” 三田村雅子(源氏物語がわかる から) 】

—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—

*** 越後長岡の「米百俵」の精神に学ぶ。 ***

(コラム作成：塾長 増田文治)

小林虎三郎は、

「早く米を分けろ！」 と、いきり立つ藩士たちに向かってこう語りかける。
「この米を一日か二日で食いつぶして、後に何が残るのだ。国がおこるのも滅びるのも、街が栄えるのも衰えるのも、ことごとく人にある。 この百俵の米を元にして、学校を建てたい。この百俵は、今でこそ、ただの百俵だが、後年には、一万俵になるか、百万俵になるか、計り知れないものがある。いや、米俵などでは見積もれない尊いものになるのだ。その日暮らしては、長岡は立ち上がれないぞ。新しい日本は生まれえないぞ。」と。

(山本有三『米百俵』より)

幕末(明治維新)の頃、日本を2つに分ける大きな戦いが、各地で起こりました。中でも、新潟県の長岡藩は当時、反政府方に味方していた為、戦さ(北越戦争)に負けて、街は荒れはて、人々は今日食べる物にも事欠いていました。その苦しい様子を知った支藩の三根山藩からは、援助のためにと米俵(こめだわら)百俵が贈られてきました。飢えに苦しむ長岡の人々からすると、それは、本当に喉から手が出るほど欲しい物でした。「これで、今日を生きることができると喜んでのです。

しかし、長岡藩の要職にあった小林虎三郎は、その援助に感謝をしつつも、米のすべてを売却し書籍や道具を購入することを提案しました。そして、国漢学校という学校を設立したのです。

後年、この長岡藩からは、新生日本を背負う多くの人物が輩出されました。東京帝国大学総長の小野塚喜平次、解剖学医学博士の小金井良精、司法大臣の小原直、海軍の山本五十六元帥をはじめ、日本を背負った人々です。

さて塾生の皆さん。皆さんにとっての『米百俵』とは何でしょうか？
私達は「時間」ではないかと思えます。今こうしている間にも止まることなく流れる時間。キミなら、どう使いますか？
その日暮らして時間や労力を使うのか。来るべき未来の為に、今何かを我慢して大きく有効に使うのか。
これを決めるのは、キミ自身です。

私達は学ぶことに、無理強いはずべきではないと思えます。いやいや勉強しても、それは「努力と知恵の貯金」になるとは思えないのです。

でも本当に学びたい気持ちが芽生えたとき、そこには「道しるべ」や「一里塚」が必要ではないかと思えます。

心配はいりません。私達が、キミの水先案内人になります。時には厳しく、時には優しく・・・。

時間は有限です。「Carpe diem (カーペ・ディエム ラテン語 一日の花を摘めと言う意味)」という言葉のとおり、時間を惜しんで一緒に勉強に熱中しませんか？ 将来の自分や誰かのために。そして人々に、未来への夢を与える様になりませんか。

きっと、キミを必要とする多くの人々が、この世界には存在しています。

